

「陶器は固い」「陶器は重い」

そんな認識を感じさせないことで、見る人に驚きと感動を与えたい。

■本記

「何がしたいか」

「陶磁器の作品」と聞いて、どんな作品をイメージしますか？ 多くの人は、お皿や、壺が頭に浮かぶでしょう。しかし、私が創っている作品はそうではありません。多くの現代陶磁器作家の作品は、素材に陶土を使い、陶芸の技法を使用した彫刻、という言い方のほうが近いと思います。私も、そういった作品を創っている一人です。

＊ 作品を表示

この作品は、**去年**の冬に大学の制作展で展示した作品です。「自然物」というテーマで自由に制作する、といった課題でした。大学の裏の民家に落ちていた、スズメバチの巣をモチーフにしています。

この素材を見つけた時、層が幾重にも重なり合う美しさを、陶芸の作品として置き換えよう思いました。そして、まず考えたことは「陶器の重たく固いイメージを、感じさせないように表現する」こと。そしてもう一つは、「陶磁器だからこそできる表現をする」こと**でした**。

「土」という自然物には、大きな制約があります。成形時に、薄すぎると崩れてしま**い**ます。この作品は、薄い層が幾重にも重なっているようで、実はしっかりした土台の上に層を張り付けてあるだけです。ひらひらした質感に見せるため、**■ ■**の先端のみを薄く伸ばしています。**さらに**奥まで層が重なって見えるように、見せ場にする部分の土台を窪ませ、そこに**■ ■**の重なり合いを作りました。このように、隠すところと、見せるところを**均衡を保ちながらつくり込む**ことで、薄く重なった層を生み出**そう**としたのです。

スズメバチの巣は、色の違った層が幾重にも重なって、見事な縞模様を造り上げています。私はこれを、「練り込み」という、陶磁器の技法を使い、**表しました**。「練り込み」とは、色の違う土を混ぜることで、マーブル模様を**はじめ**初め、様々な文様の表現**を**が可能**にする**な技法です。作品の縞模様は、数種類の土を幾重にも重ね合わせることで、**できました**模様です。このように、土本来の持つ色と、**表現の幅(技巧)を生かして**います。

陶芸を専攻する以前から、私は「人を驚かせる」ような作品を作りたい、と思っていました。「重いと思っていた物が軽い」「固いと思っていた物が柔らかい」といったように、人は、あるモノに対して持っている認識が覆された時、驚くのだと思っています。

—「陶器は重い」、「陶器は固い」、そういった認識を持っている人**が**は殆どでしょう。私は、そういった陶器への認識が少しでも変わるような作品を、作り**続け**たいと思っています。

■

副詞を省く文章というのは世にある。それも悪くない。しかし、それをきちんと使い分けられるようになるまでは、意識的に使うようにしてほしい。

■

同様に、目的語(やその一部)を省く癖がある。想定している読み手が、容易にそれを同定できる場合でも、一度は明示することを心掛けてほしい。それによって、想定外の読み手への、汎用性を高めることが出来る。



自己の目指した表現が出来ているか、出来ていないか。①創作の当事者として、確信をもって書く②自作を、一歩離れて見て、自己の創作を評価しながら書く。

どちらを採るか、それは自由だ。ただ、この文章の役割を考えると、それは享受者への良き案内人（ガイド）である。①が適しているか、②が適しているか、よく考えて使い分けてほしい。例えば青字の部分はどうか。

